

デコトラ × アーティスト × 市民 八戸の誇りと美意識



プロジェクトに大きなヒントをいただいた運送会社経営の横町秋男さん。

ハイドゥさんは、「デコトラ」からインスピレーションを受け、八戸の文化である祭りや獅子舞の要素を組み合わせた「デコトラ装束」を制作することにした。八戸で購入した古い帯や古布、ベトナムで手に入れたビーズや布地を組み合わせて、装束のデザインを考えていった。そして、はっちにオープンスタジオを開き、そこに立ちよった市民と、ひと針ひと針、「デコトラヨイサー!」のトラックの形をした装束を縫い上げていった。

まさに、オートクチュールのアトリエのように、緻密な作業が続けられた。



□ワークショップ 2011年 9月3日(土)～ 9月30日(日)
□展覧会 2011年 10月1日(月)～ 10月30日(日)



オープンスタジオに立ち寄った人たちが、毎日アーティストとパーツを制作する。

■オープンスタジオ 2011年 9/3(土)-9/30(金)
市民と一緒に「デコトラ装束」を制作するスタジオ

■展覧会 2011年 10/1(土)-10/30(日)
デコトラ展示@1階はっちひろば/映像展示@3階ギャラリー3
トラック野郎インタビューや、制作過程の記録を展示

【滞在期間中の関連イベント】

■東日本大震災メモリアル・ワークショップ『デコトラ Kids Day』
9/11(日) 13:00～15:00 @はっちひろば
協力：八戸盲聾学校

■トラックーズミーティング

デコトラトラック運転手たちとのタベ『デコトラ野郎大集合!!
～トラックドライバーが創り上げた八戸カルチャー!』
9/23(金) 18:30～20:00 @はっち1階・シアター1
20:00～21:30 交流会 @はっち1階・シアター1



■デコトラ舞パフォーマンス

10/1(土) 5:00 @陸奥湊朝市 / 10:00 @ 中心街 / 8:00 @みろく横丁
10/2(日) 07:00 @館鼻朝市

■アーティストトーク

10/2(日) 14:00～15:30 @はっちひろば
スー・ハイドゥ × 吉川由美 (はっち文化創造ディレクター)

八戸が発祥といわれている「デコトラ」(デコレーション・トラック)をテーマに、ベトナム在住のアーティスト スー・ハイドゥさんと市民が獅子頭のような新たな作品「デコトラ装束」を4週間かけて制作。でき上がった装束を身につけて踊る「デコトラ舞」(磯島未来さん振付)を市民ダンサーズとともに創作し市内各所で披露した。さまざまな人々の出会いを生み、水産業を下支えしてきたトラック・ドライバーたちが産み出した文化と美。そして、「創造する」行為の普遍性を、制作プロセスの中で再発見させたコミュニティ・アート・プロジェクトが「デコトラヨイサー!」である。



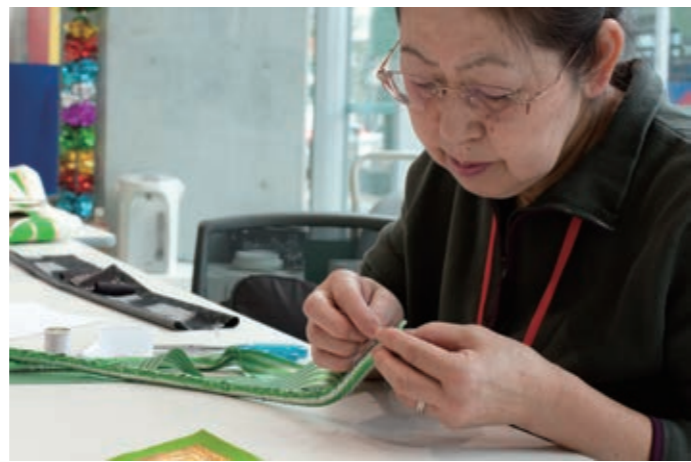
「デコトラ」の発祥は八戸らしい!ベトナム在住のアーティストスー・ハイドゥさんは、八戸でのレジデンスのためにリサーチを進めるうちに、その事実を発見した。「デコトラ」とは、電飾や特殊な部品などで車体を飾ったトラックのことだ。東映映画「トラック野郎」シリーズに登場する菅原文太扮する主役のトラックは、八戸のトラックをモデルにしたと言われている。

かつて八戸のトラック野郎たちは、八戸港で水揚げされた新鮮な魚を、全国にいち早く届けようと、競い合って日本中を疾走した。そして、孤独な時間を長く過ごすトラックを、美しく飾り立てた。「デコトラ」は、八戸の名を全国に知らしめた。

2010年秋、レジデンス本番に向けたリサーチのために八戸を訪れたハイドゥ氏は、八戸三社大祭やえんぶりなどの伝統芸能の装束に見られる意匠が、きらびやかな「デコトラ」に反映されていると考えた。八戸独自の美意識をデコトラに感じただけである。そしてそれは、ドライバーたちの趣味やプライドを表現したひとつの「アート作品」だと考えたのだ。八戸で運送会社を営む横町秋男さんから実物のデコトラを間近で見せてもらうことで、イメージが膨らんでいった。



中村さん「大変だったけど、本当に楽しかった。私自身の着るものもだんだんデコトラ風に！」



レジデンスはデコトラ制作のアトリエになった。

参加者が創ってくれたパーツが少しずつ本体に取り付けられていく。



元祖トラック野郎の夏坂照夫さんは、熱心にアドバイスしてくれた。



夏坂さんの的確なアドバイスでぐっとスタイリッシュになった。



2011年9月3日、デコトラ装束を作り上げるオープンスタジオが始まった。ハイドウさんは日本語が堪能で、気軽に会話ができた。オープンスタジオには、裁縫の得意な女性や、子どもや男性のお客さんも訪れた。おしゃべりをしながら、ビーズを縫い付けたり細かなパーツの制作をした。そのうち、常連が増えてきた。完成を目指して、みんなで作業をする時間は集中したとてもいい時間だった。しかし、最初は遊びのような作業だったのが、後半にはアーティストのイメージに合致した緻密なデザインを完成させなければならぬため、何度もやり直しになることもあった。2時間もかかって創り上げた部分にやり直しを

子どもから大人までたくさんの方が訪れたオープンスタジオ



命じられることもあり、くじけそうになることもあった。アーティスト自身も、どうすればトラックらしく見えるかわからずに行き詰った。そんな時、「元祖トラック野郎」の夏坂照夫さんに出会った。彼は、1970年代に初めてデコトラを創ったといわれる人物で、映画にも彼のトラックが使われ

ている。階上町在住の夏坂さんは、幾度となく作業場を訪れ、よりトラックらしいフォルムになるように適切なアドバイスをくださった。夏坂さんは、既製品のパーツがなかった時代に四苦八苦してデコトラの装飾を手作りしたこと、ハイドウさんの制作は同じだと理解し、プロジェクトに積極的に協力してくれた。



私が子どもの頃、夜の交差点を曲がっていく
 ギラギラしたトラックをたまに目にするこ
 がありました。2010年の秋、ベトナムからや
 ってきたアーティストのスーさんに初めてお会い
 したとき、「デコトラは八戸が発祥だそうす
 よ」と教えてもらい、ああ、あの子どもの頃に
 見た、ピンクや緑のちよっと不気味なトラック
 がそうだったんだ、と思い出しました。

八戸に来てからのスーさんは、その流暢な日
 本語で、ちよっとこわもてのトラック野郎たち
 (様)とほとんど仲良くなり、トラックの細
 部のパーツの名称や、デザインについても驚く
 ほど詳しくなっていました。まるで本物の、
 女性トラック野郎になったかのようなスーさん
 の眼差し。スーさんとトラック野郎のみなさん
 の間には、自分の作品にかける情熱という共通
 のシンパシーが流れていたからこそ、そこに新
 しい出会いがもたらされたのでしょう。

でき上がった「デコトラ装束」を身にまとい
 て踊る「デコトラ舞」の躍動感、そしてそれを
 みんなで創り上げた日々は、まるで夢のように、
 いまでも私の中でキラキラと輝いています。

今川和佳子

(企画運営グループ・コーディネーター)



■東日本大震災メモリアルワークショップ
 「デコトラ Kid's Day」 9月11日(日)

東日本大震災から半年、そしてニューヨークのテロから10
 年目のこの日、青森県立八戸盲・聾学校の生徒のみなさん
 のご協力で、スーさんと一緒にデコトラ装束のパーツを作る
 ワークショップを開催しました。それぞれの子どもの能

力に合わせて制作にチャレンジしていただきましたが、その
 出来ばえは、こちらの想像を越えるものばかりで、子どもた
 ちの感性の鋭さに驚かされました。14:46に黙祷を捧げたの
 ち、最後は生徒のみなさんが、平和への思いを込めた歌を手
 話も交えて披露してくれました。アーティストと子どもたち
 の新しい出会いが生まれた1日でした。



9月23日(金)
トラックドライバーたちの夕べ



自慢のデコトラの展示にご協力いただいた
トラックを愛するみなさん



○プロジェクトにご協力いただいた皆様

<トラック運転手たちの夕べ・デコトラ展示>

横町秋男 (㈱横町建材)、夏坂照夫 (㈱天照運輸)、峯山伸也 (みちのくみねやんの店)
荒木美鶴 (全国哥磨会青森支部長)、藤井忠右エ門、藤村英樹、芋田孝政

<デコトラ舞パフォーマンス>

磯島未来、鮫青年会、田茂敦、与田新吾、相馬典子、田端春花
井上澄子 (工房「澄」)、NPO 法人 ACTY
十六日町山車組、靴のミウラ、陸奥湊市営魚菜市场、陸奥湊朝市会場周辺のみなさん
竹尾茶店、湊日曜朝市会、館鼻朝市会場周辺のみなさん、みろく横丁

<デコトラ制作・展示>

八戸官・聾学校、(有)丹野看板店、松橋良子 (codecake)
中村泰栄 (maison de fanfare)、鈴木秀子、田名部佐知子、西塚和直、十日市有希
はっちボランティアガイドのみなさん (中村伊図、前森悦子、細谷地悦子、池田恵子、中里さち子、田村正次郎、山本裕美)

○ワークショップ参加者数：延べ約 300 人

○デコトラ舞パフォーマンス参加者：市民ダンサーズ 4 人、鮫青年会 (お囃子) 約 20 人

○ワークショップ参加者コメント

- ・中村伊図さん「大変だったけど、本当に楽しかった。私自身の着るものもだんだんデコトラ風に！」
- ・トラック野郎の峯山さん「自分たちのデコトラの世界が初めて取り上げられ、さまざまな人に紹介できてうれしかった。」

トークイベント「デコトラトラック運転手たちの夕べ」では、デコトラを愛する男たちははっちに集結した。番町スクエアやはっちひろばに本物のデコトラも展示。多くの市民が訪れ、熱気に包まれた。

夏坂さんを交えて、元祖デコトラ誕生のエピソードや数々の武勇伝をお話しいただいた。冷凍車がなかった昔、満載の氷漬けにした魚をいかに早く築地に届けるかは、トラック・ドライバーの技術と心意気にかかっていた。なるべく早く、なるべくたくさん運んでやるという八戸

のトラック野郎たちのプライドが、夏坂さんの話から伝わった。八戸の水産業振興の陰にトラックあり。トラック野郎とは普段接点がないアーティストとオープンスタジオに参加している女性たちがクロスした時に、新たな発見が生まれた。

また、アーティストによって、デコトラが醸し出す畏怖の念を与える独特の美が、八戸の伝統的な祭を彩る意匠を彷彿とさせることにも気づかされたのである。

スー・ハイドゥ氏と元祖トラック野郎の夏坂照夫氏



番町スクエアに本物のデコトラが大集合





魚を満載にしたトラックが疾走する様子を楽しんだ動きにしたデコトラ舞。



酔っ払いたちもびびくり！デコトラが横丁を駆け巡る。



館鼻埠頭には本物のデコトラも駆けつけた。



提灯の灯りが映り込むデコトラはひとときわ美しかった。



みろく横丁でお囃子でがんばってくれた鮫の山車組と。

作業を行ったハイドゥさんの約1ヵ月にわたる滞在制作（レジデンス）を経て、私たちはさまざまなことに気付かされた。ちよっと近寄りたいたい存在の「デコトラ」が、アーティストの活動によって、八戸の誇りとして捉え直され、様々な人々の出会いを生んだ。手間のかかる、丁寧な作業を通じて、参加者とアーティストの間に目標を一つにする結束と絆が生まれた。

また、日常とは異なる体験に、喜びと戸惑いの両方を常に抱きながらも、それを越える責任感で最後までやり遂げた参加者は、それぞれに自分自身の中に潜んでいた力を発見し、人と協働する楽しさを味わっていた。

デコトラが実際に活躍した場所でデコトラ舞のパフォーマンスを行うことにした。陸奥湊朝市での午前5時の公演では「イサバのカッチャ」たち（魚を売る女性たち）が応援してくれた。みろく横丁での夕方6時の公演では、酔っ払いのみなさんの声援を受けた。館鼻朝市では、買い物に訪れた大勢のお客さんがデコトラを囲んだ。かたわらには、本物のデコトラも展示された。

はっち館内でも披露した「デコトラ舞パフォーマンス」を通じ、これまであまり知られることのなかった、八戸のトラックの美学とドライバーたちのプライドが形づくった文化がまたひとつ、みなさんに紹介されることとなった。市民と協働



10月2日（日）アーティストトークでプロジェクトを振り返る。みんなが創り上げたデコトラ装束に加え、本物のデコトラも再展示された。



お囃子に乗って、デコトラはまるで生きているかのようにいきいきと舞い続けた。

参加者全員の想いが結集した「デコトラ装束」が完成を迎えた。その姿は、本物のトラックさながらのこだわりが満載のものだった。完成したデコトラをかぶって、「デコトラ舞」をいよいよまちなかや朝市で披露する。ダンス振付は鮫出身のダンサー磯島未来。鮫山車組によるお囃子にあわせて舞うことになった。

ダンサーたちの衣装も、手作りされた。裂織の文化を継承する井上澄子さんが中心となり、「たっつけ」と呼ばれる昔の庶民のスポンを再現した。磯島さんと、集まった4人の市民ダンサーたちは、試行錯誤しながら練習を重ねた。トラックの動きを模した独特の動きは愛らしく、まるでトラックが生きているかのような楽しい舞が、集まった観客を湧かせた。



デコトラ舞創作のワークショップ。デコトラの装束をかぶっていかにお客を楽しませることができるか。八戸出身のダンサー磯島未来さんと市民ダンサーズによる試行錯誤が続く。

デコトラ舞のお囃子は、鮫青年会の山車組が務めてくださった。



陸奥湊では、もっともにぎわう朝の5時にパフォーマンスが行われた。刻々と夜が明けていく陸奥湊駅前、デコトラ舞が披露された。